● ビブリオテーカ ●

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No.10
2014.10

本と私
― 本と共に歩んだ半生を振り返る ―

国際関係学部　国際教養学科
教授　渡邊 武一郎

もうじき半世紀に至ろうとする人生を振り返ってみると，自分の生き方に読書が大きな影響を与えてきたことを実感する。まだ字も読めない幼児の頃は，毎晩寝る前に母，或いは父が，枕元で子供向けの物語を一つ読んでくれた。四季それぞれに合わせたお話が並んでいるその本は，我が家の茶の間（当時はリビングルームなどという洒落たものではなかった）に何冊も並んでいたものだった。

小学生になると，多くの方も経験されたであろう夏休みの宿題の読書感想文があった。当時は図書が指定されており，本屋さんに行ってその本を買ったが，隣に並んでいる指定図書ではない本に興味が湧きながら，残念な気持ちで指定された本を手に取ったものだった。2学期が始まると，教室で読書感想文を順番に読まされたが，そもそも本を読んだ感想という，極めて個人的なことを皆の前で発表することに違和感を感じ，とても嫌だった。さらにはクラス代表を決めて，代表者が集まっての発表会という意見交換会のようなものがあり，そこでは担当の先生のリードで各クラスの代表が自分の感想を言い合い，それについて議論をするというものだった。運悪くその代表になってしまい，発表会に出されたが，他人の感想を聞いてそれに意見を言うことの意味が見いだせず，また自分の感想を人前で発表することの苦痛もあり，始終沈黙をしてひたすらその発表会が終わるのを待った。その後，会での私の様子を先生から聞かされた母からひどく叱責された。高学年になると小学生が読むべき名作集のようなものを母から読まされ，井上靖，志賀直哉，芥川龍之介，椋鳩十などを読んだ。特に椋鳩十はシートン動物記やファーブル昆虫記と並んで面白く，また自然の厳しさや切なさも感じられ，数少ないお気に入りだった。一時は獣医になりたいと思った。志賀直哉の『小僧の神様』は，何処が神様なのか分からず面白くなかったが，分かったふりをした。

中学生になると，日本文学をいろいろと読み漁った。夏目漱石，三島由紀夫，島崎藤村に始まり，太宰治，萩原朔太郎，梶井基次郎など，どういう繋がりだったのか今となっては自分でも不明だが，本屋さんの岩波文庫のコーナーの前に立って物色するのが楽しかった。当時は多くの有名作家が自殺したことを知り，自殺にある種の憧れを持っていた。自分もいつか自殺しなければいけないと思っていた。今思うと，思春期特有の幼稚さと大人ぶりたい気持ちの，相交じり合ったようなものだったかも知れない。

その後，高校の国語の授業でシュールレアリズムを知り，それまでの日本文学から一気に方向転換をした。中学生の時に友人がカミュを読んでいたが，その時は，「外人さんの書いたものなんて読んでわかるのか？」と思うと同時に，それ

を読んでいる友人がすごく大人に見えた。実際に初めてカミュの『異邦人』を読んだ時は衝撃だった。16歳の少年に本当に内容が分かったのかは不明だが，身体を揺すられるような凄さを感じると共に，何とも言えない格好良さを感じた。それ以降カミュの著作を読みまくったが，最初の時ほどの衝撃も高揚感も感じられなかった。ただ，その頃には外国文学に対して妙に構えるようなこともなくなり，その後はリルケ，ジッドなど無差別に外国文学ばかりを読んだ。

国際関係学部に入学すると，授業半分，部活半分の生活になり，それまでに比べて読書量は一時的に減少した。ただ，レポートを書く際には大学の図書館に何度か足を運ぶようになった。この時初めて開架式の図書館というものを知り，大学は凄いところだと思った。書庫に入ると独特の匂いがし，薄暗い照明と静かさもあって，一種の別世界だった。

卒業後は大学院に進もうと考えていたが，当初希望していた専攻を一冊の本を読んだことがきっかけで変えることにした。その本には，南太平洋の離島での，ある老人の見る夢と現実世界の繋がりの話など，幾つもの不思議な話が書いてあり，そこには非合理的だが心が洗われるような素敵な世界が描かれていた。当時はバブル経済の只中ということもあってか，政治，経済のみならず，文化的なことも含めて独特の浮遊感のようなものが日本中を覆っており，そこに同化したくない自分にとって，その本に描かれている世界がとても魅力的に感じられた。そんな訳で急きょ専攻を文化人類学に変更し，大学院を受験した。

その後入学したストニーブルック大学の図書館は，アメリカの大学図書館としては特に大きいものではないが，日本から来た自分にとっては非常に大きいものに感じられた。アメリカではあたり前だが，大学は24時間開いており，図書館も同様で，いつでも好きな時に行けるのは便利だった。日中の学部生たちで賑わうキャンパスも，夜には静かになる。ただ，静寂に包まれたキャンパスも大学院生のオフィスのある建物だけは別で，毎晩10時過ぎ頃からが一番騒がしく，多くの院生が2時，3時過ぎまでオフィスで勉強をしていた。また，図書館では一度に何十冊も本を借りることが出来て，院生たちは皆自分のオフィスの本棚にそれらの本を誇らしげに並べていた。ただ，返却期限を迎えると更新しなくてはならず，それを忘れると1冊あたり数十セントの罰金を払うことになる。一度に借りている冊数が多いので，1日でも更新を遅らせるとそれなりの額の罰金を払う羽目になる。更新時期になるとキャリアーに何十冊もの本を積んで図書館を往復した。

フィールドワークで和歌山県高野山に滞在した際は，高野山大学にお世話になり，同大学の図書館もしばしば利用した。初めて高野山大学の図書館に入った際に目にした，和書が平積みになっている光景は不慣れなこともあり新鮮だった。あたり前のことだが，多くの文献が漢文で書かれてあり読むのに苦労した。また，同図書館には貴重本と分類されている本があり，それを読むには予め申請し許可を得なければならなかった。アメリカの大学図書館のようなオープンな雰囲気とは対極の図書館だったが，随所に歴史を感じさせられる図書などがあり，独特の重厚感のある図書館だった。

最後に，本を読む，或いは本を書く，ということについて，大学院生の頃に聞いた話を紹介したいと思う。あるイスラム研究の世界的権威の先生が老齢にも関わらず，無理をして世界中を飛び回って講演をしていた時，その先生の元弟子の，こちらも世界的権威の先生が，「講演などその場限りで，やる意味は無い。ましてそのご高齢では身体に差し障るでしょう。そんなことに貴重な時間を使わずに研究をして本を書くべきだ。本は出版されれば，世界中の人々に，さらには活字として残るので未だ見ぬ未来の人々にもメッセージを伝えることが出来る。だから，私は講演会などの誘いは全て断り，寸暇を惜しんで本を書いている。」と進言しました。それに対し，彼の師でもあるその老齢の先生は，「私はそうは思わない。人は本を読むことで学ぶことも出来るが，直接会って目と目で見つめ合い，同じ空気を吸うことによって理解し合えることもある。だから，私はこれからも世界中での講演を続ける。」と答えました。どちらが正解でしょうか？どちらも正解なのかも知れません。少なくとも若いうちに多くの本を読むことは，単に知識の獲得に留まらず，人格形成，そして人間としての深さ，奥行き，さらには品格を育てる上で，とても大切なことだと思います。学生の皆さんには，是非図書館を訪れて沢山の本を読んでいただきたいと思います。

ESSAY

図書館，壮大な冒険への扉

国際教養学科　橋本 由紀子

一冊一冊の本には，未知の世界がある。たとえそれがかつて読んだことのある本であっても，そこにはいつも，少しずつ違う世界が立ち現れる。図書館は，そうした体験が際限なく可能な，無限の世界に開かれた場所だった。

幼少の頃より，本はいつも日常世界から自分を連れ出し，特別な世界を見せてくれた。表紙をめくる瞬間は，異世界へ繋がる扉に鍵を差し込む高揚感を立ち上らせ，古い紙の匂い，少し分厚い紙のざらざらした手触り，扉絵を飾る模様やカリグラフィー，そうしたもの全てが，読み手を一気に書物の世界へとひきこむのだった。

そうした感覚は，絵本から離れ，活字だけで構成された本へと手を伸ばすようになった小学校時代に深められる。いわゆる文学少女だったこの時期，級友をはじめ他人との交流が極端に苦手だった頃の，学校生活唯一の楽しみは図書室に行くことだった。特に好きだったのは，ヴェルヌの『海底二万里』，『十五少年漂流記』，『八十日間世界一周』，スティーヴンソンの『宝島』，デフォーの『ロビンソン・クルーソー』，スウィフトの『ガリヴァー旅行記』シリーズといった冒険譚，そして『キュリー夫人』や『野口英世』といった伝記，いわば実在の人物による波乱万丈の物語だった。タイトルを挙げていくと，読み終わるたびに図書室に駆け込み，夢中で本棚を見て回った感覚がよみがえる。ひとたび本を開けば，そこには息を飲む壮大な世界が広がっていた。異世界にのめり込む快感は，他の何にも換えられないものだった。その「世界」を手提げ袋に押し込み，家へと向かう帰り道の楽しさは筆舌に尽くしがたい。好きな物語には何度でも手を伸ばした。それでも毎回新鮮な喜びが見いだされたように思う。

もちろん自宅にも本は数多くあったが，図書室はやはり特別な空間だった。そこにある全ての本を自由に開くことができる，それだけ未知の世界が数多く眠っている場所，そこは学校という集団生活の場にあって，個々の世界に浸れる貴重な部屋だった。同時にそれは，そこを訪れる人々皆に開かれている場だった。だからこそ図書館は，多くの本が並べられた共通の風景を見せながら，その地と人々に結びつき，それぞれ独自の空間を形作っている。たとえば留学先での図書館通いには，その街やそこに通ってきた人々と，本を介して繋がる感動があった。図書館は，現実を超越していながら，同時にそこにいる自分たちに深く繋がっている世界でもあった。

書物は，多彩な歴史，そこにある風景，人々の繋がりが，作家の感性と創造性により文字化され，普遍性を持つ芸術へと昇華された世界である。本の魅力のひとつは，古今東西に広がる内外世界の再現，その息吹の再生ともいえる。私が研究している19世紀フランスの作家フロベールの言葉にもあるように，「現実をそのままうつすのではなく変容させて」，その世界を「読者に感じさせる」物語の魅力，それが世界各地の図書館，図書室に並べられている。そのような豊かな世界に，私たちは望めばいつでも入ることができる。昔はただ夢中で通っていた図書室（館）は，文学研究者となった今，貴重な研究の場でもある。それでもやはりその多様な世界は，未知の夢の世界であり続けている。

ESSAY

図書館の存在

食物栄養学科　神戸 絹代

私が小学校5，6年生の頃，教室の後ろの掲示板に読んだ本の冊数の分だけマス目を埋めていく読書ランキング表がありました。当然自宅にある本だけではマス目を埋めていくことができず，図書館に本を借りに行きました。図書館との出会いはそんな競争心から始まった記憶があります。

その後，中学・高校と運動部に所属していた私は，授業が終了するとすぐ練習に参加したため，図書館から遠退いてしまっていました。栄養士取得を目指して，本学の家政学科食物栄養専攻（現在の食物栄養学科）に入学してから，再び図書館との付き合いが始まりました。栄養士養成では，実験・実習が多く，レポートの考察は，授業の空き時間に図書館に行き，参考になる本を探してはまとめていました。この頃の図書館は，セキュリティーシステムもなく，入ってすぐのところに，閲覧用に大きなテーブルがあり，友人とレポート作成の場となっていました。この時の友人とは40年来の付き合いがあり，図書館は友人作りにも一役買っていました。しかし，今考えると図書館の存在は，本を借りに行くというより，レポート作成だけのために行っていたようで，勉強部屋の役割をしていただけかもしれない。

卒業してから20年後，本学の非常勤講師を引き受けた折に，学生時代の恩師でその当時の学科長であられた岩瀬先生から，「君のレポートは，すばらしかった」とお褒めいただき，図書館の蔵書が私の考察に貢献してくれたことを知り，図書館の存在に感謝しました。専任教員になってからは，もっぱら文献依頼の利用が主ですが，文献を受け取りに行った折に，入り口の新刊紹介コーナーで興味ある本を時々見付けることがあります。普段落ち着いて本を探している時間がない私にとっては，ありがたい環境です。

この春，40年来の友人と３人で２泊３日の旅行に行ってきました。その1人が電子書籍を利用して本を読んでいるとのことでした。スマホ，タブレットは持ち運びやすく，わざわざ図書館や書店に行かなくとも欲しい本はインターネットで手に入れることができ，どこでも読めるので便利だと，同年代の姿に少し時代遅れを感じました。私もインターネットで人気のある本などを購入していますが，電子媒体で読むのではなく本を直接手に取って読むアナログ派です。読む場所は電車の中。今でも図書館は遠い存在ですが，図書館の中で本を読める余裕の時間が来る日を待ちわびながら，時折訪れる図書館の中を眺めると，友人とレポートを仕上げた懐かしい日々が脳裏によみがえってきます。

● BOOKS WRITTEN BY FACULTY

本学部教員の 刊行物紹介

ネパールの女性グループによるマイクロファイナンスの活動実態 —ソーシャル・キャピタルと社会開発

青木 千賀子 著［日本評論社］

世界の草の根でコミュニティを基盤としたマイクロファイナンス（Microfinance: 小規模金融）が，社会開発，貧困緩和，女性の自立支援のための手段として広がっている。また，ソーシャル・キャピタル（Social Capital：社会関係資本）は，「信頼」「互酬性の規範」「ネットワーク（絆）」といった目に見えないが有用な資源として，社会開発の分野においても経済的資本と同様，計測可能で蓄積可能な資本として着目されてきた。

最貧国のひとつに挙げられているネパールでは，カースト制度の最底辺に置かれたダリットの女性グループが，マイクロファイナンスの活動を展開している。

本書では，フィールドワークによるその活動調査結果をもとに，マイクロファイナンスの活動がソーシャル・キャピタルとのシナジー（協働，相乗）効果により，貧困削減や女性の地位向上，差別構造の解消にいかに寄与しているか，社会開発における活用を明らかにしている。

「人の移動」のアメリカ史 —移動規制から読み解く国家基盤の形成と変容

加藤　洋子 著［彩流社］

本書は，人と物の移動に対する規制の分析を通じて，アメリカの国家基盤とその特色を検討し，また，（情報技術革命とグローバル化に伴う）国家の変容を解明しようとするもの。移民の送り出しや受入れに重点をおく従来の移民研究とは異なるアプローチをとる。

一般に，物の移動である輸出や，技術移転，人の移動である移民や留学は，別々の分野として扱われるが，本書は，国家基盤の形成と変容という観点から，これらを一体のものとして分析する。また，大航海時代やアメリカの領土拡張について新たな見方を提供し，アメリカの政治システムに組み込まれた「人口」とセンサス（国勢調査）がもたらすアメリカの変容についても追究している。ヴィザとアメリカの対外戦略，人の移動規制における英領植民地時代からの連続性や州権との関係などを分析した点も新しい。アメリカ研究を専攻する研究者たちから，「新鮮」「刺激的」「面白い」といった感想が，本書に寄せられている。

筒井徳二郎　知られざる剣劇役者の記録 —1930～31年　22ヵ国巡業の軌跡と異文化接触

田中 徳一 著［彩流社］

本書で取り上げたのは，昭和初期，演劇交流と国際親善に貢献した筒井徳二郎（1881年～1953年）という大阪出身の剣劇役者の足跡です。今では知る人もいませんが，世界恐慌下の1930～31年に1年3ヵ月，剣劇と歌舞伎で欧米22ヵ国を巡業して，王侯貴族から一般庶民に至るまで感銘を与え，「世界の剣劇王」と称えられました。そればかりでなく，著名な演劇人ではフランスのコポーやデュラン，ドイツのピスカートアやブレヒト，ロシアのメイエルホリドなど，現代演劇の開拓者たちがこぞって筒井の芝居から刺激を受けています。20年の歳月がかかりましたが，筆者は海外調査を重ねて21ヵ国，19言語にわたる資料を収集し，一座の巡業経路を跡付けながら，各地の反響調査を行いました。なぜあの大恐慌の時代に世界各地でそれほどの反響を呼ぶことができたのか。この役者の海外巡業の軌跡と異文化接触は，今日から見て意外性と刺激に富んでいます。

資本主義の終焉と歴史の危機

水野 和夫 著［集英社新書］

本書は日本の国債利回りがなぜ17年の長きにわたって2.0％を下回っているか，その原因を考察したものである。資本主義を「資本の自己増殖運動」と定義すれば，ゼロ金利下の日本ではこの20年近く資本の増加ができないことを意味している。そうであるから，過剰マネーが世界中でバブルを生成させ，新興国の台頭は資源高を招来させている。前者はバブル崩壊過程で企業リストラが起き，失業率や非正規社員の比率が高まり，後者は売上-投入の差である付加価値を縮小させ，付加価値の6～7割を占める人件費を抑制させる。

資本主義は元来「中心」と「周辺」からなり，従来「周辺」は南側世界だったが，グローバル化の加速で先進国内に「周辺」が生みだされ中間層が没落する。資本主義が終焉を迎え，それでも資本を増やそうとあがけばあがくほど，民主主義が危機に陥る。まさに「歴史の危機の真っただ中」にあり，資本主義をとるか民主主義をとるかの選択を迫られている。

明治維新と陸軍創設

淺川 道夫 著［錦正社］

日本における近代軍隊の建設は，明治維新を契機として本格的に着手されることとなったが，その創設期の実態については必ずしも明らかになっていない。本書は，維新政府の陸軍創設過程にスポットをあて，当時の建軍構想や用兵思想を踏まえつつ，直轄諸隊の編成，諸藩に対する軍事的統制策・国軍としての軍紀形成・欧米からの軍事技術導入と兵器統一といった諸問題について，実証的な考察を試みたものである。

維新政府の中では国軍としての陸軍建設にあたって，既存の藩兵（武士階層を主体とした壮兵）に依拠するか，身分制に依らない兵員素材（四民平等の徴兵）を召集するかという問題が，薩長の藩閥対立と絡んでシリアスに議論され，前者は三藩徴兵や御親兵，後者は辛未徴兵という形で併存することとなった。結果的に日本陸軍は，廃藩置県による藩権力の解体を経て，旧藩常備兵からの志願兵を母体に，徴兵令によって召集される新たな兵員を逐次加えながら建設されて行く。ちなみに日本陸軍が壮兵・徴兵の混成軍を脱却して，完全な徴兵軍となるのは明治16（1883）年のことである。

● 本学部教員の共著など一覧

書名	著者名	出版社
人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか	**水野 和夫** 著	日本経済新聞社
アベノミクスは何をもたらすか	高橋 伸彰，**水野 和夫** 著	岩波書店
成長のない社会でわたしたちはいかに生きていくべきなのか	**水野 和夫**，近藤 康太郎 著	徳間書店
増訂 経済学の基本原理と諸問題	**大淵 三洋** 編著；**川戸 秀昭**［ほか］執筆	八千代出版
国際政治経済学新論－新しい国際関係の理論と実践－	**川戸 秀昭**，**円居 総一**，**小林 通** 共編；**法専 充男**，**夢沼 智之**，**陳 文挙** 分担執筆	時潮社
ワンアジアの使者たち－アジア共同体をめざして	鮎川 良 著；**鄭 勛燮** 分担執筆	芦書房
転換期の東アジアと日韓両国	文 燉，**鄭 勛燮** 編著	日本大学国際関係学部
宗教と現代がわかる本　2014	渡邊 直樹 責任編集；**横田 貴之** 分担執筆	平凡社
Moving Out of the Margins and into the Mainstream: The Demographics of Asian Americans in the New South	Arthur Sakamoto，ChangHwan Kim；**武井 勲** 分担執筆	Univ. of Illinois Press
現代国際関係の基本文書　上・下	鹿島平和研究所 編 **黒川 祐次** 共編集	鹿島平和研究所
チェーホフの短篇小説はいかに読まれてきたか	井桁 貞義，**井上 健** 編	世界思想社
英語文化研究（日本英語文化学会創立40周年記念論文集）	日本英語文化学会 編；**宗形 賢二** 分担執筆	成美堂
北米文化事典	日本英語文化学会 編；**宗形 賢二** 分担執筆	日本英語文化学会
Geschichte und Geschichtsbilder in den Beziehungen Japan - Europa	hg. von Siebold-Wissenschaftsstiftung；**佐藤 マサ子** 単著学術論文収載	Koenigshausen & Neumann
Techno-Ethics － Humanities and Technology －	ed. by Konrad Meisig；**佐藤 マサ子** 単著学術論文収載	Otto Harrassowitz
場面で学ぶドイツ語基本単語	**眞道 杉**，小笠原 藤子，鈴木 伸一 著	三修社
福祉国家と教育：比較教育社会史の新たな展開に向けて	広田 照幸，橋本 伸也，岩下 誠 編；**長嶺 宏**作 分担執筆	昭和堂
ゲルの安定化と機能性付与・次世代への応用開発	矢内 雅人 企画編集；**太田 尚子** 第8節 分担執筆	技術情報協会

※ゴシック太字は本学部教員

所蔵資料紹介

幕末の英語教科書と沼津兵学校

『英語階梯』『英吉利會話』『英蘭會話譯語』

国際教養学科　宗形 賢二

フェートン号事件で始まった英語への関心はペリー来航で火が付き，幕末から明治にかけての日本ではすでにかなりの英語学習熱が見られることは『福翁自伝』にもある通りである。日本大学国際関係学部図書館「駿河文庫」にも，当時の熱っぽい英学の様子を覗ける貴重な資料がある。今では色あせ古ぼけた小型の和紙の綴りであるが，実は「開成所」発行の①『英語階梯』（慶應２年＝1866年発行第1版），②ガラタマ先生閲『英吉利會話』（明治４年江戸 渡部氏刷行）と，その対となる③ガラタマ先生口授『英蘭會話譯語』（明治元初秋 渡部氏蔵梓）である。

①『英語階梯』は英語学習のための総合教科書であるが，和紙にローマ字が印刷されている。扉には，“AN ENGLISH SPELLING-BOOK, WITH READING LESSONS, FOR THE BEGINNERS AT THE SCHOOL”，続いて“**kaiseidzio** IN YEDO, FIRST EDITION, YEDO. THE 2. YEAR OF KEI-OU.”と印字されている。全25丁の和装本で，アルファベットの紹介から始まり，子音や母音など英語音声の基礎と語彙習得を合わせた解説，短文の読解練習などと，簡潔かつ合理的に構成された英語の教科書である。

②は，同じく和紙で，“CONVERSATION OF ENGLISH LANGUAGE; FOR THOSE, WHO BEGIN TO LEARN THE ENGLISH BY R. VAN DER PYL.　THIRD EDITION. **NUMADZ…WATANABE**& CO. FOURTH YEAR OF MEIJI”と印字されている。ここのガラタマ先生とは1831年生まれのオランダ人であり，開成所のいわゆるお雇い外国人（化学の教官）であった。上記の２冊ともガラタマ先生が校閲，口授した体裁をとっているが，正確な処は分かっていない。元々オランダのファン・デル・ペイルの英語入門書の一部を，明治元年，開成所手伝いの川本清次郎などが翻訳したものと云われる。

周知のように開成所とは，文久３年（1863年）に設けられた江戸幕府の洋学教育研究機関であるが，その起源は文化８年（1811年）に設置された蕃所和解御用の一局であった。つまり，ここが外国文書の翻訳を行う日本初の公式機関であったことになる。後に1855年「洋学所」，翌年「蕃書調所」（ばんしょしらべしょ）と改名，昌平坂学問所の下部組織になり，さらに「洋書調所」，そして「開成所」となった（いずれも後の東京大学の前身）。短期間で次々と名称を変えたのは，いわゆる「洋学」の役割と幕府内での位置付けが明確ではなかった証しであろう。しかし，その業績は優れたものであった。英語関係では，文久２年（1862年）に『英和対訳袖珍辞書』（A5横判，953頁）を，掘達之助を編集主幹とし刊行，見出し語35,000の大事業であった。この時のローマ字活字や手引き印刷機はオランダ政府から幕府に寄贈されたもので，西洋紙も輸入品，さらに日本語の活字は木版で作成した和洋折衷の貴重書で，わずか200部しか作成されなかったという（『日本英学のあけぼの』）。

駿河文庫の『英語階梯』は和装であるが，これは輸入物の西洋紙が入手できず，代用品として和紙を使い，印刷機にかかる程度の小型の書物に仕上げたと思われる。

しかし，なぜ幕末や明治初年の英語の教科書が，「**NUMADZ**」で「**WATANABE & CO.**」によって印刷されたのか。答は「沼津兵学校」にあった。維新により徳川家の静岡への移住に伴い，洋学における教授陣や蔵書の主体は静岡と沼津へ移ったのであった（『静岡県英学史』）。明治元年に発足した静岡（府中）学問所には，当時の一等教授中村正直の名も見える。沼津では洋式の軍隊教育を目指し，明治元年（1868年）開校，初代学長は西周であった（明治5年東京に移転）。

沼津兵学校の当時の記録に，一等教授並として渡部温（旧名一郎）の名がある（わたなべおん，1837年～1898年）。長崎で洋学を学んだ渡部は，幕府の洋書調所（開成所）で英語を教えていたが，大政奉還後は，沼津兵学校の教授となる（実質４年足らず）。その語学力は抜群で，廃藩置県後は東京外国語学校校長などを務めた。また，アダム・スミスを最初に紹介した一人であり，イソップ物語を『通俗伊蘇普物語』（明治６年）として翻訳しベストセラーとなった。

この沼津兵学校の教科書として沼津で刊行された書籍は「沼津版」と呼ばれ，兵学校が発行元のものと，渡部温が編集・発行した無尽蔵版と呼ばれるものとに分けられる（『沼津市史資料編近代１』）。従って，駿河文庫にある「渡部氏刷行」や「渡部氏蔵梓」と書いてあるものは，渡部氏が沼津兵学校時代，沼津まで運ばれた旧幕府のスタンホープ印刷機でローマ字を印刷したものであるらしい（樋口雄彦氏によれば石版印刷機説もある）。日本語は木版印刷という（本学淺川教授談）。ガラタマ先生閲『英吉利會話』は，いわば江戸で出版されたものの復刻版であったが，共に当時の英学及び印刷事情を考慮すれば貴重な資料であろう。特に③『英蘭會話譯語』には，当時の英語の読み方が赤字で記してあり面白い。「ホヲスピイキスズエイル」（第三章一），「アポンマイヲノウル」（同廿）など，一種の「変則英語」であったようで，当時の学生たちの英語学習の苦心が垣間見られる。

「駿河文庫」は，昭和42年，駿河銀行からの基金により，本学部図書館課長であった三浦吉春氏が中心となって収集したものという。この中には，サミュエル・スマイルズの『自助論』の中村正直訳『西國立志編』明治庚午官許（明治４年出版）などもある。これは正直が静岡学問所で教鞭をとっていた時期の出版物でもあり，興味は尽きない。

①英語階梯
（慶應２年＝1866年発行第1版）

②ガラタマ先生閲
『英吉利會話』
（明治４年江戸 渡部氏刷行）

③ガラタマ先生口授『英蘭會話譯語』（明治元初秋 渡部氏蔵梓）

※赤字部分の原文は“Who speaks there ?”と“Upon my honour.”

推薦図書紹介 ● RECOMMENDED BOOKS

ロビンソン・クルーソー　上・下

ダニエル・デフォー 著 ／ 平井　正穂 訳［岩波書店］

国際総合政策学科　小林　通

この小説は，1719 年に出版され，その後次々と再版を重ね，また第1部から第3部まで出版されました。第１部は，ロビンソンという船乗り（実在者あり）が船の難破によって孤島に漂流し，自給自足生活を送り，その後帰国する過程の物語です。言うまでもなく，子供時代にこの物語を読んだ人は多いのではないかと思われます。見知らぬ非常な場所でロビンソンが，１人で頑張り続けた生活に心から勇気付けられたり，胸躍る冒険心を煽られたりしたのではないでしょうか。事実ルソーは，その著『エミール』の中で「エミールは，かのロビンソンから実に多くの重要な考察を引き出すことになるのではなかろうか。…これはあらゆる年齢の人にとって興味のあることだし，いろいろな方法で子供にとって楽しいものにすることができる。（注 1）」と評しています。

実は本小説は，経済学の参考書の最適なものとして紹介されることがあります。その理由は，この物語中に経済の基本的な見方・考え方がかなりな程度含まれているからです。例えば，その１つは，18 世紀中葉からイギリス産業革命が起こりますが，その前段階として準備され必要とされる人間（労働）の勤勉さや節約について述べ，２つ目は，富イコール貨幣ではないということを示し，３つ目は，経済分析用語である「迂回生産」，「機会費用」などの概念を具体例として無人島での生活を通じて展開していることです。また彼は，正に合理的な人間であるアダム・スミスの「経済人（ホモエコノミスト）」を彷彿させるのです。それというのも，当時，作者のデフォーが経済学者として活躍し，かなり高水準の経済分析によって，イギリス経済全般に亙っての経済状況を論じていたからです。それも 1930 年代に入るまで知られていませんでした。学生諸君は，本書をこのような観点を踏まえてからお読みいただければと思います。

注 1『エミール』ルソー 著／今野 一雄 訳［岩波書店］1980 年発行　326 頁，333 頁

貨幣と欲望 ー資本主義の精神解剖学

佐伯　啓思 著［筑摩書房］

国際総合政策学科　円居　総一

本書は，社会現象としての経済の本質解明に努めてきた著者，佐伯啓思のライフワークの集大成とも言える書である。2000 年に出版した，『貨幣・欲望・資本主義』に更なる考察を加え，「経済を動かすものは，一体何なのか」，その原点に遡り経済を突き動かすものの本質を，「人間の欲望と貨幣の作用」の連動性から明らかにしている。

今日，グローバル化や市場化，資本主義の行き詰まりを巡る論議は多々あるが，大半は学問的細分化に根差す部分接近の域を出ていない。現在の倫理なきグローバル市場主義の進行は，かのジョージ・ソロスが指摘したように「市場価値」と「社会的価値」の決定的対立をもたらし，市場秩序の基盤となる社会的価値をも破壊し始めている。この変化の本質や展望は部分接近では解き明かせない。佐伯は，自身の専門分野である経済思想史と社会経済学の深い知識を基に，哲学，社会学，精神分析などにも越境する。著者の言葉を借りれば，それらを「歴史と思想史の大きな流れに流し込み」，フロイトやラカンの精神分析やニーチェ，ハイデッカーなどの哲学思想，さらにはウェーバーやゾンバルトの社会学的思索をも採り込んで考察を進め，資本主義の台頭から現在までの資本主義の変質過程と社会の変遷を解明していく。

これを縦糸としてグローバル市場主義の動態を解き明かす一方，重要な横糸として倫理なき市場主義を助長した経済学に対する厳しい批判を織り込み，現在の危機を浮き彫りにする。市場至上主義としての新古典派経済学とその信奉イデオロギーがその対象だが，それが世界を，そして日本経済と文化を如何に破壊してきたか，徹底的に検証している。

本書は，日本と国際社会が直面する危機への的確な洞察を与えてくれると共に，そのアプローチは，「学際性」を持った分析の理想形ともなっている。一見読み難そうだが，思索の流儀を見事に体現した本書だけに読み進み易い。知的基盤強化のためにも読書の秋ベストの一冊である。

みえない雲

グードルン・パウゼヴァング 著［小学館］

国際教養学科　安元　隆子

この小説は，1986年のチェルノブイリ原発事故を機にドイツのグードルン・パウゼヴァングが執筆し，翌年刊行された。14歳の少女ヤンナ・ベルタを主人公に，実在する原発の架空の事故を描いている。刊行後，ドイツを始めヨーロッパで大きな反響を呼び，親子2代に読み継がれ，学校でも原発の是非を問うディベートの教材として用いられたという。そして，結果的に脱原発への世論形成に寄与した小説だと評価されている。その後，この小説はコミックにもなり，また映画にもなった。しかし，コミックや映画はお薦めしない。なぜならば，原作を大きく改変しているからだ。前者は主人公をとりまく人々の描写が浅薄で，後者は主人公とその同級生の恋愛を主軸に人々のパニックシーンの描写に重きを置いている。そして，最も重要だと思われる末尾の場面―ヤンナ・ベルタが父方の祖父母と対峙する場面が両者ともカットされている。だが，このラストシーンこそ小説の根幹をなすものであり，大事な意味を持っている。その意味を知るためにもやはり小説を読んでほしい。原作を読めば，ヤンナ・ベルタが被曝症状に苦しみ，多くの人々の死に遭遇しながらも，「生命」の尊さに気付き，希望と共に「生きる」ことを志向するに至る理由がわかるだろう。そして，彼女の強さは彼女が幼い頃から接して来た母方の縁者の生き方や思想から影響を受けていたことも。その点なくしてこの小説は成り立たない。また，末尾の場面からは「怒り」の「感情」をぶつけることから「言葉」による「説得」を志す少女の姿を読みとることができ，「成長小説」としての一面も持つ。そして，作者は我々に「核」エネルギーに対する考察と反省を促すと同時に，しなやかで強い「女性」たちの登場や「血縁を超えた家族」の可能性を示し，これまでの社会を支えてきた男性原理や家族観を超える，新しい思想を模索する必要性も訴えているようだ。福島原発事故から３年経った今も事故の終息は遠い日本。ドイツは福島の事故を契機に完全に脱原発に舵を切った。我々は今後どのように進むべきなのか，考える契機を与えてくれる著書だ。

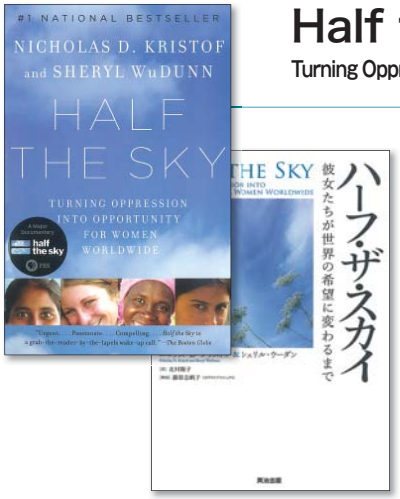
A Very Short Introduction

[Oxford University Press]

国際教養学科　スティーブン・ドレイジ

Oxford University Press published the first Very Short Introduction book in 1995. Today the series is still going strong with over 400 titles on a wide range of subjects from Islam to Globalization; Science to Sociology; and Literary History to Economics. Written by experts and often well-known authors, each book introduces its subject to the ordinary reader in clear, lively English (60 or so titles have also been translated into Japanese). The books' short, compact form works a kind of magic; for somehow, in about 150 very readable pages, each writer captures the essence of their subject, packaging its history, key ideas and issues, and sometimes its controversies, without ever talking down.

Three of my Very Short Introduction favourites are Michael Wood on *Film*, Simon Critchley on *Continental Philosophy* and Terry Eagleton on *The Meaning of Life*. Eagleton's book is profound but written with his characteristic humour. All three books illustrate the way Oxford typically matches the subject with just the right author. Whatever subject you are interested in these concise and well-designed books offer ideal and stimulating introductions—see www.oupjapan.co.jp/academic/vsi.



※日本語版も本学部図書館に所蔵しています。

Half the Sky

Turning Oppression into Opportunity for Women Worldwide by Nicholas D. Kristof and Sheryl WuDunn [Vintage Books]

ビジネス教養学科　バリース・キンセラ

Half the Sky has a lot to offer young minds. The writers champion oppressed women in developing countries and strongly argue that the human rights violations can and must stop now. This book presents you with horrifying examples of modern day misogyny (discrimination against women), human trafficking, forced prostitution, slavery and violence as an accepted part of society. It is a global problem directly affected by and sometimes sustained by international business and politics.

The writers wish to shock you into action and present answers to the question: "How can I help now?" Both the survivors' stories and the ideas for change stress empowering young women by educating them and helping them to reach the economic independence necessary to speak out against injustice.

Half the Sky is by no means a perfect guide to recognizing and abolishing oppression, but it is a great starting point for self-education. To create change abroad you must first be aware of the state of women's rights in your own country. Though *Half the Sky* does not provide you with this information, it can help you recognize the signs. A simple internet search will provide you with shocking statistics of oppression and violence in many first world countries including Japan. In order to empower others, you must first empower yourself through knowledge and (self-) education.

フードファディズム　ーメディアに惑わされない食生活

高橋　久仁子 著［中央法規出版］

食物栄養学科　中島　久男

近年，食品・メニューの偽表示や毒物混入など食の安全・安心を脅かす事件や事故が多発し，毎日の食生活に対して漠然と不安を抱いている人が多いのではないか。また，人々は健康でなければならないとする風潮にもさらされている。食への不安を背景に発信される様々な食情報は，かえって食生活を歪んだものにさせているようにも思われる。人間の食行動は生物学的に必要な栄養素を本能的に求めるものと，過去の経験や知識に基づいたものとで成り立っている。後者には食生活の判断材料として正しい食情報が重要である。しかし，巷には非科学的で不可解な食情報が氾濫している。筆者は，わが国で初めてフードファディズムを取り上げ，食情報の問題を科学的な視点で捉えて分析してきた。ファディズム（faddism）とは一時的な流行を熱心に追いかけることを意味している。今日のフードファディズムは，食物や栄養が健康や病気に与える影響を「○○は体に良い・悪い」など二分法で評価して，特定の食事法や健康法を過大に信奉し，ことさら強調する傾向がある。本来，科学的に解明された健康的な食生活の基本は，一時的な流行やブームによって変わることはない。偏ったフードファディズムは健康被害を引き起こすだけではなく，適正な食生活そのものを脅かす存在となる。さらに詐欺的な商法により経済的な損出をもたらすなど，広く社会に悪影響を与える恐れがある。本書では，次々と出現し消え去ったフードファディズムの実例を解説し，不可解な食情報に惑わされない食生活を示している。また，フードファディズムがはびこる背景として，ブランドや流行に敏感で簡単に健康を手に入れたいとする消費者の意識があり，売れる情報の発信を目的とするマスメディアにとってフードファディズムを蔓延させる格好の環境となっている。本書には，フードファディズムに陥らない健康的な食生活を実践するために必要な考え方や情報リテラシーが示されている。

STUDENT'S VOICE

大学生活を支えてくれる場所

国際総合政策学科４年　高見澤　寿

皆さんの中にも，大学生活を送っているうちに思い入れの深い場所や居心地の良い場所を見付けると思いますが，私の場合は図書館です。図書館の雰囲気は静かで勉強も捗ります。図書館で調べごとがあればパソコンを使用でき印刷もできます。気分転換に映画やドキュメンタリー番組なども鑑賞することができ，スポーツや経済，ファッションなどの雑誌や新聞なども見ることができます。もちろん本も借りることができ，書庫内でも図書に囲まれたキャレルデスクで勉強することができます。書庫内には専門書が多く並べられており，私はその所蔵の豊富さに興奮しました。５月には日・EUフレンドシップウィークがあり，EUクイズに答えるとEUグッズが貰えます。これはかなりレアな商品で見逃すともったいないのでぜひ行ってみてください。

職員の方々は皆さん優しく丁寧な対応をしてくれます。パソコンの使用やビデオ鑑賞の際に異変が起きたら迅速に対応して問題を解決し，学生が快適に利用できるように尽くしてくれますので，非常に頼もしいと思いますし，あの姿は私自身も見習うべきだと実感しました。

このように日本大学国際関係学部図書館は素晴らしい環境が整備されています。その環境で私は政治や経済の動向を知るために日本経済新聞を読みます。一人暮らしをしている私にとって，新聞を無料で読めることは非常にありがたいので来館した時は必ず読んでいます。新聞は一通り目を通すのですが最も注目しているのは「私の履歴書」です。ここでは政治や経済界の著名人に限らず，かつてスポーツ界でトップアスリートだった人々からも寄稿があり，自分自身の人生を振り返るというものですが，ここで語られる経験談は非常に興味深い内容となっています。新聞を読むことによって見識が広がり知識が深まりますので，皆さんもぜひ新聞を読んで知識を吸収してください。

図書館以外にも勉強する場所はありますが，私は図書館が最も勉強が捗る場所だと思います。静かな雰囲気があり，エアコンが効いて快適な温度であるし，勉強に励んでいる他の学生を見ると刺激を受けるからです。図書館にはこのように魅力が溢れており，利用の仕方次第ではいくらでも自分の可能性を広げることができます。図書館は私の大学生活を支えてくれる場所であり自己研鑽に欠かせない場所であると確信しています。この環境で勉強できることは大変恵まれていると思います。

最後に，図書館を利用する皆さんに言いたいことは，図書館を利用する際は私語を慎むことなど，マナーを守ることを心掛けましょう。ここで身に付いたマナーは社会に出て役立つものですので，これを機に身に付けてほしいと思います。そして図書館を利用して自分を磨き，充実した大学生活を送ってほしいと思います。

国際機関資料室から　● INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER

日・EUフレンドシップウィーク2014
「クロアチアの魅力を知る」開催

ＥＵ情報センターを併設している国際機関資料室では，毎年５月９日のヨーロッパ・デーを記念して，日本とEUの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年は，５月９日（金）～５月30日（金）まで，図書館１階閲覧室及び国際機関資料室にて，「クロアチアの魅力を知る」のテーマで展示会を開催しました。

昨年，２８か国目としてＥＵに加盟したクロアチアの魅力を，ポスターや資料で紹介しました。絵のように美しいと表現されるクロアチアの観光名所の数々，アドリア海の青とオレンジの屋根のコントラストが鮮やかなポスターは，来場者の目を引いていました。

国際機関資料室のグループワーク・エリアでは，クロアチアの観光案内や食文化，男子学生に人気があるクロアチアのサッカーを紹介。また，最新号の雑誌をダウンロードできる図書館の新聞・雑誌データベース「プレスディスプレイ」より，クロアチアの雑誌の切抜きを掲示し，最新のクロアチアの風俗を垣間見ていただきました。

また，恒例のクイズでは，展示資料に関連した問題を出題し，駐日欧州連合代表部から提供いただいたキティちゃんストラップや，ユーロコインを模ったキーホルダーなどのEUグッズを景品として出させていただきました。

６月にはEUフィルムウィークを開催し，「英国王のスピーチ」や「レ・ミゼラブル」，「ローマ法王の休日」など，EU加盟国のDVDをアイスティーやお菓子と共に堪能していただきました。

今回は，日本人にとってあまり馴染みのない国であったクロアチアの美しさや素晴らしさを紹介することができました。今後も，EUやEU加盟国の知られざる魅力をこのイベントで紹介していきたいと思います。

日本大学国際関係学部図書館ニュース
BIBLIOTHECA
第10号
通巻第155号
発　行　日／2014年10月1日
編集・発行／日本大学国際関係学部図書委員会
http://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/